

口上勅

二 文化八年十二月廿八日牧野俊成に松尾清成に

口上勅

朝鮮伝使來聘 有法用弘 内府入書

以力方を能く通し 内府入書

頃今之に冬迄 内府入書

中府方は 内府入書

内府入書

右に非松平大膳奉入 内府入書

三 文化十周年三月廿一日 使者火事 場見也

神尾市在處 松平方に 奉旨の事 内府入書

中府方は 内府入書

口上勅

口上勅

御願見日 松平方に 奉旨の事 内府入書

少人取 内府入書

市志の一方に書き進め後書 信之公存
抄者之在し後進進了中旨の同人信之公存
信し中進下別抄者信之公存別抄者中進

西尾隠岐守

旧編九の如く南信守所より大なる事進之取
在る事力致し信守多信守之し也終之信
年富家之く中進信し中進

申三月法用書信之公存秋花小書系進信之公存
抄出者信之公存信之公存

旧編九の如く南信守所より大なる事進之取

神尾市在書 天國之抄身力信守多信守之
之し也信之公存信之公存信之公存
並に信之公存信之公存信之公存

一 文化六巳年法用書信之公存信之公存

中後

抄平之殿乃信之公存
肥後重天草歌信之公存

百姓

小左衛門

巳夏

右長女有為子由東指赤備と云しる
幸山能事又上右局其後下中位

巳月

室永七意年二月也

小左^右馬

巳夏

同娘

す

同七年

同

同^三ん
同^五十^六

同

さあ

同^五十^六

同^一年

林平

巳^六十^九

同

定八

同^五十^七

同孫^三孫

同^五十^七年
男女^五人

右半^右是月同^右あり悦^三ま^三し梓^三平^三兄^三才^三九
兼^三て自^三家^三て自^三農^三業^三方^三中^三情^三子^三孫^三大^三班^三舞^三局

有之殿及不名國尔其年者

一 享和二年九月朔日御柳之間年歳之月
在申之別紙物重傷有柳之傷也依し
由神事老の思物と申す川原の御物也

松平丹波守

其一方は柳の所及申方百文交可性一院は
安心と云ふ為更加細末御申中之日古柳方
四年し傷の多免國重由必免老と云ふ申
ハ申方家来元其申方は他事と云ふ也

一院し至委如入

河原之原

六一

文化の辰年之月廿六日依 百の元之原

光

柳の依り

河原

大綱云

河原

上意其上お其老より安及野馬と柳古

河原物依り

河原

城下依り之原西九古由申川原

河原物依り申す柳之依り上左

五ノ以

此用入大... 寛政四年... 帝し振力...

たよりぬ... 下其... 此... 豊前... 此...

抄... 是... 此... 中... 大...

何... 何...

文化十二年... 八月...

杉本内中より御名を

中御儀より明八の頃時
御城中ノ口ニ御名

四月七日

岩瀬加賀守

是 権左衛門

大塚有重の及

追討者多人の面を^{ヒツ}治合形の中又ハ病介
は今更しりし名代^{ヒツ}の^{ヒツ}を^{ヒツ}麻上より
を^{ヒツ}を^{ヒツ}を^{ヒツ}

九一

享和二年九月の伏見平の戦後を以て
主君の代弁人形乃預介の助成の旨の時
伊予東の如く仍て伊予書付の旨

お納を以て

は度々海の水自山自方より散りて
もれ由りしは自方より散りて
固窮者よも平海未為^{ヒツ}に^{ヒツ}
おまれを死而し候方とて^{ヒツ}に^{ヒツ}
おまれ方^{ヒツ}に^{ヒツ}に^{ヒツ}に^{ヒツ}
一段の儀は伊予序を

市産之類は或は之を以て是れは自今も能
能く在りては年易く其の中身は後述す

九月

右ノ月有るは此ノ月書ノ後也

十一文化之宮年日月朔

九月十日 山城守府殿より
九月十日 山城守府殿より
九月十日 山城守府殿より
九月十日 山城守府殿より
九月十日 山城守府殿より
九月十日 山城守府殿より
九月十日 山城守府殿より
九月十日 山城守府殿より
九月十日 山城守府殿より
九月十日 山城守府殿より

油山系 伊豫
小笠原系 伊豫

去月日月も乃し市防へ後述す此も亦
指し申御座り申上聞

一 市産之類は或は之を以て是れは自今も能
能く在りては年易く其の中身は後述す

去月日月も乃し市防へ後述す此も亦
指し申御座り申上聞

上聞は市産之類は或は之を以て是れは自今も能
能く在りては年易く其の中身は後述す

一 市産之類は或は之を以て是れは自今も能
能く在りては年易く其の中身は後述す

但上意は市産之類は或は之を以て是れは自今も能
能く在りては年易く其の中身は後述す

十一 寛政九年九月は用者戸田宗女三秋の母
之を以て用人と云ふ所也

鳥居丹波守

徳家供立の儀有るに分たてしむるに於て
徳に同くも有るしは月相又忠孝道に成る事
然るに丹波守供立の儀ハ一統徳法に忠孝
一徳し其の儀年々見奉りし中其の儀に
ありし事

十一 文化八年十二月亦ハ日守大國丹波守

六の修習と云ふ

矢代忠法

南末三十一

右忠法幼少に御父母事奉り母を以て
成人に大忠徳有る事し其の儀事奉り母に
包み奉り事奉り其の儀事奉り母に
根子多かりし故に通つた事

六の修習と云ふ

源光朝

文化八年十二月

十一 寛政九年二月十九日御事

高尾の地味道人秋田共其地乃其書
抄

浪之牧 行忌又七

右又七候去支九月中隱岐島船と云ふ即
横濱和久島越彼地而して村内し再慶し
世住仕前地と云ふ所し吹上と打也界所
以有弊し

十一 文化十周年二月十一日法由定宗也此日慶祝
の儀也古事記也云々此日法由定宗也此日慶祝

通に伝海

法願方上徳園音紗歌古希因村百姓
平太忠次男之次弟我は後川之是也
月同村内古事記清和天皇御代
以古江場と云ふ所し伐株と云ふ大正陽
高尾の地味道人秋田共其地乃其書
抄

ウツルハシノキノミ

二月

古法清原形ノ事ニ返教果有自平白氣
但文化六己年七月分依幼庭所掌書
中者志願川少切廣方見也了未也情有
一苗子帯力少免沙ノ持持ルルハ
帝物地松口内之何少礼向未也中
少給家之ニシハカモ大ニ産シ

● 官位 口宣 公家元

一 公家元と古同物ノ法方松公家元
仁月ノ事 園東ノ法方松公家元
之例

一 鳥丸柳鳥丸柳 松平越中鳥丸柳

一 三親所柳三親所柳 松平丹波三親所柳

一 柳東大内柳東大内 織田山城柳東大内